
僕はここにいる

酒主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はここにいる

【Nコード】

N8069D

【作者名】

酒主

【あらすじ】

暗い水の中。ガラス越しに見つめる影。僕はここにいる。

僕はここにいる。

僕はふとガラスの向うの人影を見る。見るといつても、僕は目が悪い。ただ、ぼんやりとガラスごしの人を感じる。

1人、2人、3人。

僕は目が悪い分、耳は良い。どの影がどんな事を言っているのか、聞き取れる。

今日はとても、雰囲気の良い日だ。

水の中、前の奴が糞をした。今日に限ったことじゃない。毎日毎日、繰り返される。それを顔に浴びながら、ひれで流す。前の奴が、と言ったが、もしかしたら、自分の糞が、廻りまわって流れてきただけなのかもしれない。

もう、どうでもいいじゃないか。

相変わらず、水の底はぬめぬめとどろどろが交りあった様な、感触で。何だろう、何で今日はこんなに憂鬱なのか。

「あの子のこと、私、何もわかってなかったのよ」

「そんなに自分を責めるな」

何百回も繰り返されたガラスごしの、この会話。僕はもう慣れっこのはずなのに。何だ、何なんだ、どうしようもなく気分が悪い。

そのうち、ぶくぶくつとした可愛い男の子がこちらに寄ってきた。

4歳と7ヶ月……。

何で知ってるって？

当たり前じゃないか。僕の弟なんだから。

9歳も離れた弟。はじめは厄介な者が家にやってきた、としか思わなかったが、歩く様になり、しゃべるようになった。

「にーに」「にーに」と僕を追っかけまわす、ちっこい弟。そのうち僕にとって弟は、とても大きな存在になった。

澄んだ目は、僕を真っ直ぐ見る。

「きもい」「汚い」そう言っ僕をバカにする連中たちの目とは、
ほど遠い。崇高で、神秘的で、純粋な魂が放つその光は、僕を真っ
直ぐ見る。

真っ直ぐな光は、僕を照らし、僕は救われた気分になる。
差し出された、ぷくぷくとしたまん丸い手が水の中に入ってく
る。

そう、僕のいる場所に。

「シュンちゃん、ダメツ。汚いじゃない。おてて洗ってきなさい」
ガラスごしのもう1人の影。
母親。

僕はここにいないじゃないか。なんで、汚いなんて言っ、弟の手
を引っ込めさせたりするんだ。

弟はふくれっ面をして、僕のいる水槽の水をかきまわした。

洗濯機の中のように、ごぼごぼと音をたて、円状の流れができる。

僕達は、否が応でもその流れに乗らざるを得なくなった。

「これっシュン！」

一瞬。

一瞬だった。

僕の体が、弟の手と重なった。

「やった、とつと、とつと触った」

熱い。

人間の体はこんなに熱いものなのか。

弟の手で僕は火傷をしたような感覚に陥った。

ふと、人が泣く声がした。

まただ。

また、泣いている。

僕の母親。

「あの子も、魚が好きだったわね。毎年、たくさん金魚を買ってき
て、水槽で飼うの。シュンが女の子だったら良かったのに。どうし
ても、あの子の姿を重ねてしまう……」

「女の子だったとしても、あの子の影が消えるわけじゃない」

「でも、あなた」

「とことん、悲しんであげよう。あの子を想ってあげよう」
いいこと言うじゃないか。

父親は何も言わないが、大好きだった。一緒にペットショップに行つて、いろんな魚を見せに連れていってくれたり。勉強なんて、できなくても、お前らしく生きればいい。

僕は父の一言だけで生きてこれた。

ん？

死んでいるのか。

僕が魚になつたということは、そういう事か。

僕をいじめた奴らは、警察のお世話にでもなっているのだろうか。それとも、何食わぬ顔をして世の中を闊歩しているのか。

どうでもいい。

そのうち、僕は体の異変に気がついた。

弟が触れた部分は、白く変色し、ぼろぼろぼろ僕の体から、僕がはげ出した。

壊れていくのがわかる。

ぼろぼろぼろと。

「おいっ。病気じゃないのか？」

ぼろぼろはがれ落ちる僕の異変に気がついたのか、父親が覗きこんだ。

僕はもとと死んでいる。

病気になつてはがれ落ちたところで、これ以上誰も悲しみなんかはしない。

数日がたち。

僕は醜く破れて、文字通り、ぼろぼろの紙くずみたいになつた。

体は自然と宙に浮き、水の底には戻れなくなった。あえぐ様な呼吸の音を聞いた。自然と苦しくない。水面に差し込む光が、紙くずの様な僕の体に差し込む。

天国にやつてくれるのか？

「とっと、死んじゃった。とっと」

僕は弟の手の平にいた。

父親も覗き込む。「かわいそうに」

庭のかたすみ、僕が小さい頃、埋めたどんぐりの横に埋められた。

今度は真っ暗だ。今までより、もっと悪い。

3人の声も影も感じる事ができなくなった。

僕はそのまま、土の中で過ごすのだろうか。

やがて、朽ち果てていく僕の体に、ギューンと痛みがはしった。

どんぐりだ。

どんぐりが芽を出した。

僕の真ん中を突き刺して、どんどんどん伸びていく。

僕は芽の先端に突き刺さったまま、土の外へ出た。

木は、どんどんどん伸び、家の屋根を追い越した。

良かった。また、家族の姿を見ることが出来る。

今度の僕は、魚だった僕の時より目がよく見えて。

弟の可愛い顔も、はっきりと見えるようになった。

弟は小学校にあがったのか。

立派なランドセルを背負って出かけていく。

また、痛みが走った。

全身を駆け巡るような、電気の。痛い、痛い、痛い。

「痛い！」

「……」

光が飛び込む。僕の目に。死んだはずの僕の目に。

「あなたっ、あなたっ。衛まもるが、衛まもるがっ」

また、魚に戻ったのか。

目がよく見えない。

誰かが、僕の手に触った。

手。

長いこと忘れていた僕の一部分。

父親か？

僕に覆いかぶさって、頬をよせる。父親の涙が滴り落ちる。そして、僕の手にくくくくとした小さい手が重なり合う。

「シュ、シュンか」

「衛、衛、お母さん、衛が」

僕は生き返った。

魚になり、どんぐりの木になり、この世に戻ってきた。

僕はもうちょっと経って、意識がはつきりしてから気がついた。

僕の枕元にある袋に。

どんぐりがいっぱい入っていた。

僕が治るようにと

弟が毎日毎日、どんぐりを拾ってきては、その紙袋に入れたんだ。

僕はここにいる。

僕がそう言わなくても、みな僕の実在を感じてくれる。

僕はそれだけで幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8069d/>

僕はここにいる

2010年10月8日15時31分発行